

FUEKI

vol. 74



高い志を持ち、

先駆的で地域への波及効果がある取り組みに

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、

福武教育文化賞の式典は規模を縮小して開催しました。

贈呈後、受賞者の皆さまからこれまでの活動、

そしてこれから活動について発表をいただきました。

今年度も素晴らしい受賞者の皆さまをお迎えすることができ、

改めて岡山県の教育文化活動のひろがりを感じています。

(10月31日、岡山市内ホテル)



2020年度（第2回）福武教育文化賞贈る
川嶋絢氏、柴田れいこ氏、備中志事人に



夢に向かって弾き続ける

川嶋 紗氏 ピアニスト



受賞理由

障がいを抱えながらも、幼少期からピアノへの強い想いを抱き、日々努力を重ねながら地道な演奏活動を続けている。身体的なハンディキャップを自ら創意工夫して克服し「聴く人の心に残るようなピアノを弾けるように頑張っていきたい」という前向きな姿勢は、同じダウン症の子どもやその保護者に、障がいにとらわれない生き方の多様性を提案している。大好きなピアノを弾き��け、積み重ねてきた実績は、地域における子育て支援や障がい者への理解を広げることにもつながり、岡山県の音楽による地域振興に大きく貢献している。

主な取り組みと実績

保育園での鍵盤ハーモニカの演奏が機となり、5歳からピアノ教室に通い始め、高校2年生の17歳の時、初めて障がい者ピアニストのコンサートに参加した。手が小さく、通常の指使いでは弾けない楽曲を自分なりにアレンジしたり、音符は自分で読みないため、カタカナや記号で認識したりと日々努力を続けてきた。

国際障がい者ピアノフェスティバル・全国大会やカナダ、オーストリア、台湾などの国際大会へ参加する一方、自宅近くのカフェレストランにおける月3回のランチコンサートの実施を軸に、地域の幼稚園や小学校での演奏、病院や高齢者施設などでの慰問公演

また、同じ障がいを持つピアニストたちによるグループ「宙(SORA)」への奏で」のメンバーとして、独自に各地での演奏活動を行つたり、台湾の障がい者音楽家たちと現地での交流も続けてきた。新型コロナウイルスの感染拡大により、2020年3月に計画していた津山市での交流コンサートは延期となつたが、台湾との国際交流活動はライフワークとして続けたいと願つている。

受賞者のコメント・お祝いの言葉

川嶋智子さん(川嶋紗氏の母)

ダウン症の娘が生まれた時、障がいのある彼女がピアニストとして生きるという選択があり、多くの演奏会で演奏をする機会をいたなくことや、その後このような展開が拡がっていくことは、全く想像もつきませんでした。

娘は、幼い時からピアニストになりたいという夢に向かって歩み、ひたすらピアノの前に座り続け「一萬回の法則」があることを、私たちに教えてくれました。もちろん彼女がピアニストとして生きるという選択があり、多くの演奏会で演奏をする機会をいたなくことや、その後このような展開が拡がっていくことは、全く想像もつきませんでした。

娘は、「受賞はとても嬉しい。これからも、辛い人や苦しい人に私の弾くピアノを聴いて元気になって欲しい」と、受賞の喜びを語っております。



今回、このような素晴らしい賞をいただき、障がいの有無に関わらず選択肢の一つとしてこんな生き方もありかなと、親ばか人生を歩んできた私たちと娘を、ここに至るまで見守り支援してくれださった多くの皆様に、娘からのご恩返しとなとなれば幸いです。何よりも娘が地域で生きてきたことへの一つの証をいただいたような気がして大変嬉しく思っています。

娘と共に今日の日まで歩んでくることができたことに改めて感謝し、今後も娘が社会の中で一杯自分の役目を果たして、一人の人として輝いて生きていくことを願い、これからも娘の応援団の一人でいたい





性を通して地域や社会課題写し出す

柴田 れいこ 氏

写真家



受賞者のコメント

素晴らしい賞をいただき大変感謝しております。私は50代になつてから大学で写真を学びました。その後女性たちの生き方に視点をおいて写真作品を作つきました。

高齢化社会に向かう50代の女性たちが深層に抱く焦燥感や不安感を見つめた作品、日本の国際化の中で日本人男性のもとへ嫁いで来た外国人女性たちの姿を伝えた作品、そして県内の戦没者の妻の皆様を取材した作品を作りました。戦争の悲惨さを風化させず若い世代に伝えなければならぬという思いでした。そのような気持ちからこの写真集を県北の中学校高校の図書室に寄贈させていただきました。私はこれまでモデルになつて下さった方々も含めて本当に多くの皆様に背中を押していただきながら勇気が湧いてきました。私はこれまでモデルになつて下さった方々も含めて本

がら、社会をみつめて活動を続けていきたいと思います。



お祝いの言葉

岸本和明さん(奈義町現代美術館・館長)

最初に手掛けた個展「天女の羽衣」では、地域で暮らす女性の今の姿を撮影し、高齢化社会へと向かう中で、女性たちの深層にある不安や焦りを表現した作品を発表しました。また日本人と結婚した外国人女性を撮影した「Sakura さくら」は、日本の風習の中で様々な困難を乗り越えて力強く生きている姿に心動かされ、岡山という地域から世界を表現する試みのもと始められた作品である。太平洋戦争で夫を失った女性たちの肖像と証言を記録した「届かぬ文・戦没者の妻たち」は、3年以上かけて50人以上の女性の話を聞き、戦地には赴いていない女性側から戦争の悲惨さを訴えた作品である。

主な取り組みと実績

一貫して女性をテーマとして撮り続けた作品は、地域や社会的問題に焦点が当てられており、そのさりげない表現の中には、それぞれの女性の生き方に対する温かな思いとやさしい視点があふれている。県内外で開催される写真展やトークイベントは、地域について再考する新しい指標となつております。鑑賞者へこれから生き方を考えるきっかけを与えていたる。世代を担う表現者の一人であり、その表現活動は幅広い世代への力強いエールとして高く評価され、教育的な効果も期待される。



このたびは、栄えある福武教育文化賞受賞本当におめでとうございます。お二人の子どもさんが卒立つた52歳で大阪芸術大学写真学科に入学、一から写真を学び卒業後、本格的な創作活動を開始され、今日まで本当に強い意志と使命感をもつて地道な作品発表を重ねてこられたと思います。貫して女性をテーマに撮影し続けていくことで、地域や社会が抱えている問題に焦点が当たられており、女性の内面にある喜怒哀楽や今を生きている道程の記録を後世に伝えていくそのさり気ない表現の中には、それぞれの女性に対する温かく優しい眼差しに溢れたもので、伝道師的な役割を内包させた大変に貴重な創作活動でもあります。この受賞を機に、これからもどうか益々のご活躍を期待しております。

世代と地域の枠を超えて

備中志事人（代表 藤井 剛）

受賞理由

中高生たちの地域づくりに関わる人材育成や地域における学びの場の創出活動を精力的に行つており、岡山県内で同様の活動を開催するグループを巻き込みながら、県全体のネットワーク組織の母体としての役割を果たしている。高校教育などで、「地域学」的な実践型教育が急速に求められるようになつていて、このネットワークを短期間で広げ深めた実践力は高く評価されている。岡山県の地域振興に大きく貢献している。今後、全国への広がりと、更なる継続的な活動が期待される。



受賞者のコメント

備中志事人は2017年に誕生したばかりの、4歳にも満たないヨチヨチ歩きの任意団体であるにもかかわらず、このような素晴らしい賞をいただくことができ、光栄である以上に恐縮しております。

当初は井原・矢掛・笠岡・浅口を中心とした、まさに備中地区で活動をスタートしましたが、気がつけば岡山県全域につながりがで、最近では県外からの参加も増えるなど、志とネットワークの広がりを実感し、嬉しくも身の引き締まる想いを抱いております。

これも、マイプロジェクトを切り口にした「若者と大人の出逢いと協働の場づくり」の必要性や重要性、何よりも魅力を感じ、中高生の学びを最大限引き出すために、いつも熱い想いと遊びを忘れず、損得抜きで一緒に一緒に活動を楽しんでくれる有志たち（我々は互いに『ヘンタイ』と呼び合う）の存在についてこそと心から感謝しております。

今後も形にとらわれることなく、新たな価値を生み出す一步（マイプロ）を実現できるよう精進してまいります。



お祝いの言葉

福武教育文化賞の受賞、誠におめでとうございます。（岡山トヨタ自動車株式会社・代表取締役社長）

「全国高校生マイプロジェクトアワード」の運営補助及び生徒引率など、マイプロジェクトを全国の高校生に広げる取り組みを行っている。

また、県内での活動のみならず、全国高校生マイプロジェクト実行委員会（認定NPO法人カタリバ等）が行う「全国高校生マイプロジェクト・スタートアップキャンプ」やローカルサミットで中高生から提言された「大人はもっと本音を語って欲しい。大人と一緒に意見交換したい。そのためには勉強する。自分たちも社会に主体的に参画したい」という声を真正面から受け止め、志と共にする皆様が連携して中高生が大学生や大人と関わりながら、自らのアイデアを具現化する場を作つてこられたことに感謝申し上げます。

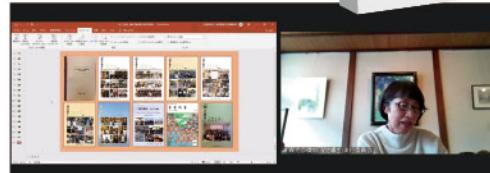
私も「ジブンゴト学会」や「コノユビトマレ合宿」に参加して、大変勉強になりました。中高生の発想とパワーに触れると、将来は明るいと確信できます。また、大学生を含む志事人の皆様を見て、大人の役割は子どもたちの発想を真正面から受け止め、彼らに寄り添うことであり、彼らからパワーをもらい、より良い社会を共に創ることだと感じました。今後も志のネットワークを広げ、子どもたちと共に学び、事を起こしていく場を各地に作られることを大いに期待しています。

初の試み、 による 2019年度教育文化活動助成成果報告会

ZOOMオンライン
午前・午後で各4団体が発表

午後の部

14時
～
16時



②備中「聞き書き」実行委員会 森光康恵さん
「高梁川流域の高校生による聞き書き」



④白石踊会 三宅範行さん
「白石踊に魅了された高校生によるPR活動」



①岡山大学まちづくり研究会 小山拓也さん
「瀬戸内市にて地域のニーズに大学生が応える」



③邑久高校セトリー運営指導委員会 矢野祥子さん
「SDGsの視点から地域課題探究と成果発表」

参加者感想

- ◆ 良い勉強になりました。分科会で文化活動の「つながり」の話がでましたが、こういったお話や出会いは、この場を作ってくださるので生まれてきます。
- ◆ 学校現場として地域でどのような活動ができるか、継続して行うことができるか課題はありますが、お話を聞き頑張っていきたいと思いました。勉強になりました。
- ◆ コロナでなかなか活動ができませんが、皆さまのお話を聞き、たくさんの刺激をいただきました。
- ◆ 他団体の活動はとても参考になりました。
- ◆ 若い方が地域と繋がっているということが、素晴らしいと感じました。また今後のリモートを含めた活動の方向も大変勉強になりました。
- ◆ 同じ地域の学校の頑張りを知ることができて大変心強く感じました。
- ◆ どのように伝えてゆくのか、広めるのか、という課題に気づかせていただきました。
- ◆ 高校での地域探究活動も初めて知りました。これが地域の底力になるのが楽しみです。
- ◆ 皆様の報告を聞き、自らの活動を再考したいと思いました。
- ◆ Zoomによる成果報告会、いつもより良かったですね。
- ◆ コロナ禍でもみなさんしっかり活動されていることがわかりました。参考となる内容も盛りだくさんで今後の参考になりました。
- ◆ ブレイクアウトルームでは、部屋ごとに司会またはファシリテーターがいた方が良いと思いました。質問者と回答者を繋ぐ人がいると、より議論が深まります。
- ◆ 財団が中心になって、大学や高校、その他団体が連携して開発していくことに意義があるのではないかと思いました。

審査委員コメント

午前の部

前田芳男／岡山大学地域総合研究センター教授
「どの団体も助成を受けることによって成長ができたという部分があった発表でしたので、とても充実した活動だったと感じました。組織の成長も促す活動、経験が若い人たちの学びにつながる活動、地域の価値を上げようとする活動、地元の人たちの気持ちに合わせて作り上げていく活動と、いずれも助成金の意義にあった活動でした。今までの活動プラスアルファの活動に挑戦している取り組みだったと思います」

午後の部

小山悦司／倉敷芸術科学大学教授
「どの活動も教育文化による地域づくり、人づくりに合致した取り組みでした。大学公認のサークルというユニークな取り組み、10年続いている聞き書きの活動、生徒全員が探究に取り組んでいる高校、伝統芸能の継承に取り組む高校生、若い人たちの活動が印象的でした。コロナ禍の中で、地域の自然豊かなところで仕事をするような動きもあります。未來ある若い人たちが地域に戻ってきて活躍してくれる、そのような日を楽しみにしています」



毎年、参加者400名を迎えて市内ホテルで開催していました成果報告会・交流会を新型コロナウイルス感染拡大防止のため、今年度は11月23日(土)、Zoomによるオンラインで開催しました。成果報告会は、午前の部、午後の部で各4団体が発表し、その後ブレイクアウトルームに分かれてセッションや質疑応答をしました。初の試みでしたが、約150名という参加者を迎え、チャットやブレイクアウトルームなどZoomならではの機能を活かし、対面とはまた違う充実した成果報告会を開催することができました。

午前の部

10時
～
12時



②飛島ガーディアンプロジェクト 日置幸さん
「若者による笠岡市飛島の伝統文化伝承活動」



①Neighbor Kitchen 杉本克敬さん
「学童での対話と調理のワークショップ」



④シネマニワ 黒川愛さん
「ボーランド映画祭in 真庭中央図書館の開催」



③OKUTSU芸術祭実行委員会 辻本高廣さん
「鏡野町奥津にて芸術祭を開催」

「もつといろんな人に 料理を 食べてもらいたい」

SHINONOME Kitchen

代表・牧原直太郎

「地域食材を使った高校生によるシノノメキッチンの開催」

津山東高校食物調理科の高校生が地域に出向き、その土地の特産物を使用した料理を提供する出張イベントを行う。活動の中で「高校生でもできること」「高校生にしかできないこと」を見つけて、地域住民とのコミュニケーションを通して、高校生の有意義な学びの場、地域活性化への貢献と実践的な実習の機会をつくる。



活動をはじめた理由



小学生の頃、卵焼き作りにはまり、それから料理をすることが楽しくなって岡山県立津山東高等学校食物調理科に入学しました。岡山県立高校では唯一の厚生労働省認可の調理師養成施設です。生徒一同、卒業と一緒に調理師免許を取得することを目標に様々な専門教科に意欲的に取り組み、調理実習も毎週行っています。

多くの専門的知識を身につける調理師の卵たちが、自分たちの学びを披露する場は年に一度の文化祭のみ。それ以外は製菓販売等での出店でした。「もつといろんな人に料理を食べてもらいたい」と思っていた時、真庭市で地域と人を元気にする活動を行っているまにワッショイの代表岡本康治さんに「頑張る高校生が地域の方に料理を提供する場」と声をかけていただけのがきっかけでこの活動が始まりました。

自分たちが実習ではできると思っていたことはお客様の前では割とできなかつたりします。がつた、と僕自身活動を通じて感じました。

高校生の内に地域貢献活動をしていたということも、これからの人生きつと自信に繋がると思います。

卒業後も、後輩が高校生の内に地域貢献活動をしていたという生きつと自信に繋がると思います。

「食」のプロフェッショナルとして活躍するためのお手伝いをし続けたいと思っています。

元気いっぱいの笑顔とチームワークを大切に活動するシノノメキッチン

私が、

僕が、



「同じおやつを食べる喜びを子どもたちに」

お年寄りの知恵やプロの技を取り入れながら、学童保育や保育所の子どもたちに地場の材料をメインに季節の手作りおやつを提供する。移住者の保護者が中心となって活動することで、地域に知り合いのいなかった移住者の新たな繋がりや移住先での不安や子育てを話し合える場としての役割も果たす。ワークショップなども随時開催。

「みんな一緒に食べられたらしいな」
おやつさん
岡野牧子

地域のおじちゃんが子どもたちのために植えてくれたさつまいもをみんなで掘りあげ、お芋をたっぷり使って作ったハリネズミスイートポテト。



2011年、東日本大震災を機に関東から岡山に移住しました。しばらくして子どもを預けるようになつた学童兼保育所のような「あそびのきち おひさま」。そこには地域の方から野菜などの差し入れが多く、旬を上手に取り入れた手作りの食事を子どもたちがモリモリと食べる姿に感動しました。せっかくなら、子どもたちが楽しみにしているおやつも、地場のもので季節を感じる手作りおやつで、みんな一緒に食べられたらしいな……そんな思いが募り、手作りおやつに共感してくれる友人に声をかけ2017年、週に一度おやつを届ける「おやつさん」を立ち上げました。同じ移住者でもある友人の加藤奈津子さんが、楽しく美味しく安全なおやつをモットーとしている「ぜろどーなつ」で学童おやつを始めていたのにもとて励ました。

毎回試行錯誤ですができるだけ地産地消、季節のものを取り入れたおやつを提案しています。移住者のちょっとしたおしゃべりの場としても大切な時間になつており、これからもじんわりと温かい場を拓げていきたいと思っています。



FACE

子育て広場まんなか 代表
岡田 直子さん

旭竜幼稚園の跡地活用を目指して

「長女が授かるまでは、地域との繋がりは希薄でした」と照れくさそうな岡田さん。そんな岡田さんが地域で活動を始めたきっかけは、近くに親や親しい友人、顔見知りさまざまもない状態での子育て、いわゆるアウェイ育児を経験したこと。また、西日本豪雨（2018年）で家の周りが浸水被害に遭い災害の恐怖を味わったことも大きなきっかけとなつた。

孤立しがちな未就園児の親子や待機児童、小学生が安心して遊べる居場所をつくりたいと「子育て広場まんなか」の活動を仲間たちと始めた岡田直子さん。現在は地元のコミュニティハウスを利用していますが、将来の拠点にもしたいと日々奮闘中。活動のきっかけや活動を通して感じことを岡田さんに伺いました。

「子どもが病気になったときインターネットやSNSでたくさんの情報を得ることはできますが、信頼していいものか不安になります。でも、近所のママ友からのアドバイスは信頼できますよね。災害のときに、オムツを貸し借りができるのもママ友ですしあざというときに頼れるのは『近所の方です』」と話す。地域の大切さを実感した岡田さんは、自分のように地域社会との接点がなかった若年層の意識を変え、自分が住んでいる地域に目を向けてもらいたいと思った。そのためには、まずは子育て世代を対象に子どもたちが安全に遊べて、親は見守りながら情報交換ができる場「子育て広場まんなか」を地元のコミュニティハウスで始めた。定期的に開催しながら、地域の方も参加できるイベントも企画し、交流できるようにした。

最初は、「子育て広場まんなか」のことも岡田さん自身のことも「何?」「誰?」という感じだった。それから町内の掃除や集まりなどに積極的に参加して、自分の要望だけを伝えるのではなくて、町内の一員としてできることをやっていった。活動を続けていくうちに、だんだんと認識してくれるようになつた。活動が定着し、つながりが深まるなかで、世代間交流の拠点となる「場」が必要と感じていった岡田さんは、改めて閉園した幼稚園を使いたいことを町内の人たちに話していくた。幼稚園は、岡田さんの家から見える場所にある。「閉園するまでは、15時～16時半まで園庭で遊ぶことができたので、用事がない時は、暑くても寒くとも、よく行っていました。ふたりの子どもが幼稚園の運動場で遊んでいたり地元の小学生たちと一緒に遊んでくれて、スーパーとかで会うと声をかけてくれるんです。それがとてもありがたくて、嬉しかった。そういうのがなかつたら、この活動は始まつてなかつたかも」と振り返る。

岡山市内には天候に左右されず、室内で体を動かして遊べる場所が少なく困っているというママたちの声も後押しになり、来年度から「子育て広場まんなか」の活動を「岡山市子育て広場」の活動として閉園した幼稚園で開催したいと行政に提案している。まだ開催できるかどうかは未定だが、町内会の協力を得ながら幼稚園の跡地活用の第一歩を踏み出そうとしている。

岡田直子（おかだ・なおこ）／子育て広場まんなか 代表

1982年津市生まれ。法政大学卒業。MOMOnatural脇木工に7年勤務。結婚を機に退職。夫の転勤により2013年より岡山市在住。不妊治療を経て、現在5歳と3歳の娘を授かる。2019年に仲間たちと任意団体子育て広場まんなかを設立。NPO法人申請中。

新たな脳の回路が開かれた!?
グラフィックレコーディング

vol.10

and F 教室

体験記

「グラフィックレコーディングの基本の「き」を学ぶ」は、ノートを使ってのワークショップ形式で開催しました。その体験を黒部麻子さんにリポートしていただきました。

黒部麻子／ライター

最近、話題のグラフィックレコーディング（略してグラレコ）。人々の対話や議論を、グラフィックにして可視化する手法のことです。

私はライターという仕事柄、お話を聞いてメモを取る機会は多いのですが、いつも文字ばかりでぐちゃぐちゃ。絵は全く描けません。そんな私でも大丈夫かしら…?と、一抹の不安を抱えて参加しました。

当日の参加者は、すでにグラレコを練習中という方から、初めてやってみるという方まで、いろいろでした。講師の北浦さんのほんわかしたトークで、和やかに始まります。

グラレコで大事なのは、「タイトル、トピック、流れ」を書くこと。グラレコの魅力は、論点のズレが整理できたり、議論への入りにくさを解消する契機になること。そんなお話を期待がふくらみます。

聞き入っていると、「とにかくやってみましょう!」と、お題が出されます。まずは「基本アイコンを真似して描く」。北浦さんのお手本を見ながら、3分間で描けるだけ描いていきます。次は「参加者のみなさんのアイコンを描く」。その後は、「コロナ禍での〇〇」という全員共通のお題が出され、自分自身のストーリーをグラフィックにします。徐々に難易度が上がっています。

最後は、「シノノメキッチン」の活動をしている高校生の牧原直太朗さんのお話を聞いてグラレコにする、というワークです。私はいつもの癖で、とりあえず一通り文字でメモを取ったのですが、北浦さんは「30分までに描いてください」と言います。

時はすでに14時25分。「30分間で」の間違いかな?と思ったのですが、ぴったり14時30分に、非情のゴングは鳴ります（笑）。私は牧原さんのアイコンをどう描くか思案しているうちに終わってしまいましたが、みなさん、しっかりグラレコができていました。話を聞きながら同時に流れを掴み、グラフィックで表現していくって、なんて高度な技でしょう。

濃密な2時間でした。グラレコという新たな世界を垣間見、優しくもスバルタな北浦さんの指導のもと、出来はともかく一生懸命手を動かしたことで、何か新たな脳の回路が開かれたような気がしました。普段からイラストや視覚的な表現が得意な人はもちろん、私のようなタイプの人にもおすすめです。



「シノノメキッチン」の活動をグラレコに



講師：北浦菜緒氏
／カンコーマナボネット（株）所属／教育コーディネーター
被服学を学び、環境問題解決を動機に菅公学生服（株）に入社。マーケティング・広報戦略・学校魅力度化等を経て、現職。県内外の教育関係者や企業人との学び場づくりや魅力化に携わる。2019年より、岡山県井原市ひとづくりアドバイザーを務める。

地域を盛り上げる「吹屋の紅だるま」

2015年の冬、私は地域の宴会で出てきた赤い柚子胡椒と出合いました。聞けば隣町で作つたとておきの自家製柚子胡椒だという。コーヒーの空き瓶にパンパンに入れられた真っ赤で攻撃的な見た目。恐る恐る鍋に溶かしてみると、華やかな柚子の香りに心を掴まれた。そして、目が覚めるような唐辛子の刺激！頭から湯気が出た。

この柚子胡椒は今まで出合つたどの辛味調味料とも違い、衝撃的な美味しさでした。紅色の顔料「べんがら」で栄えた赤の町「吹屋」を表すに相応しい調味料だと感じ、「この柚子胡椒で地域を盛り上げたい！！」そう決意しました。そこからレシピを教わり、地域の人の多大な協力を受けながら、吹屋の新たな特産品作りが始まりました。柚子胡椒の原料となる赤唐辛子を栽培し、寒暖差で磨かれた完熟ゆずを集め、ひとつひとつ丁寧に加工。初めのうちは火を吹くような唐辛子の刺激、体を突き刺す棘だらけの柚子の収穫作業で全身ボロボロになりました。

2016年、満身創痍で作り上げた赤柚子胡椒ができ、吹屋の繁栄の願いと手に取った人が幸せになるように願いを込めて「吹屋の紅だるま」と名付けました。初めて食べたあの日のように、私たちが味わった感動を届けたい。佐藤紅商店は辛味調味料を通して、ビリリと辛い感动と喜びをお届けします。



大
吉



佐藤 拓也

SATO takuya

佐藤紅商店 代表

1986年京都府長岡京市生まれ。2012年田舎暮らしに憧れ、大阪より移住。岡山県高梁市成羽町の地域おこし協力隊として吹屋地域を中心とした活性化に取り組む。2015年、活動の中で出会った柚子胡椒に感銘を受け、地域住民とともに特產品として開発。2017年、佐藤紅商店を立ち上げ、吹屋の紅だるまを中心に辛味調味料の製造・販売に取り組む。

佐藤紅商店

<https://satotakunejp.stores.jp>

■昨年の2020年は、どこでもいつでも、ずっとマスクをしていた。新型コロナウィルスの出現は世界が翻弄され、日本でも3月からの小中高校の一斉休業、4、5月の緊急事態宣言。その後も「三密」を回避し、「新しい日常」を模索していたが、秋から再び第三波となり、いつ終わるのか、安全なワクチン接種が待たれる。■昨年は、財団でも必要にせまられてオンライン会議を始め、大規模なフォーラムや成果報告会もオンラインを活用して実施した。対面には劣ると思っていたが、思いがけない手ごたえや予期せぬ成果を感じている。■とりわけ10人程度の「エリア別 and F情報交換会」は、助成対象者一人ひとりの思いや考えを深く知る機会となった。なごやかに活動紹介や近況報告で始まるが、中盤になると助成事業の悩みやエリアの共通課題等々で盛り上がる。審査委員にもオブザーバー参加いただき、課題解決につながる助言や地域のキーマンの紹介があったりする。「また、やってください」と今まで参加した方々の評判もいい。コロナ前にはなかった、新たな交流や連携を生み出すきっかけとなる予感がする。助成対象者同士がゆるやかに繋がって一層有益な場になるようにしていきたい。■コロナ禍でも出来ることがある、コロナ禍だからこそ出来ることがある。そんな意欲の高い地域の活動団体の皆さんをこれからも応援していきます。2021年もマスクでやや息苦しいですが、引き続き、宜しくお願いします。(O)



公益
財團法人

福武教育文化振興財團

人づくり、地域づくりを応援します

〒700-0806 岡山市北区広瀬町1番5号

株式会社ベネッセコーポレーション広瀬町社屋
TEL:086-221-5254 FAX:086-232-3190
URL:<http://www.fukutake.or.jp/ec/>
E-MAIL:eczaidan@fukutake.or.jp



機関誌 不易 FUEKI vol.74 2021.1.25

編集・発行:

公益財團法人福武教育文化振興財團

制作:株式会社吉備人

デザイン・イラスト:タケシマレイコ

印刷:研精堂印刷株式会社